



国立大学法人 東京工業大学は、創立から140年を越える日本最高の理工系総合大学。世界を舞台に科学技術の分野で活躍できる人材の輩出と地球規模の課題を解決する研究成果で社会に寄与している。東京工業大学 学術国際情報センター 情報支援部門では、Sophos Intercept X Advancedを導入して教職員および学生の情報セキュリティ対策を強化している。

CUSTOMER-AT-A-GLANCE



東京工業大学
Tokyo Institute of Technology

東京工業大学

学 長 益一哉

所在地 〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1

(2021年12月現在)

ソフォスソリューションズ

Sophos Intercept X Advanced



5社の製品を比較検討し、本学の要件定義に合致した情報セキュリティ対策であると判断して、Sophos Intercept X Advancedを選定しました。

東京工業大学
学術国際情報センター 情報支援部門
杉野 暢彦 教授

「世界最高峰の理工系総合大学」の実現を目指して改革に取り組んでいる東京工業大学。同大学は、大岡山、すずかけ台、田町の3つのキャンパスに学士課程約4,900人、大学院課程約5,600人の計約10,500人の学生が学び、うち約1,800名が海外からの留学生になる。そして、学生の教育研究を支えるために、約1,100人の教員と約600人の職員が在籍している。140年を超える歴史の中で、産業を牽引する多くの科学・技術者を育み、日本の基幹産業の創成と発展を担うとともに、最先端の研究成果を創出してきた。同大学では、最高峰の理工系総合大学に相応しい情報セキュリティ対策

を実践するために、Sophos Intercept X Advancedを選定し最先端のテクノロジーで全教職員と学生を守っている。

ビジネスチャレンジ

「日本最高の理工系総合大学に相応しい情報セキュリティ対策を検討」

東京工業大学は、学部と大学院を統合した6つの学院の中に数学や機械に情報工学など20以上のコースがある。学生自身の興味を高める教育体系の中で、約10,500名の学生が学び、約1,100名の教

員と約600名の職員が、教育や研究を支援している。同大学で、全教職員と学生の情報セキュリティ対策を担ってきた学術国際情報センター 情報支援部門の杉野 暢彦 教授は、その取り組みの一端を次のように話す。

「本学の教職員には、情報システム緊急対応チーム(T2CERT)を中心に、以前からセキュリティ意識を高める啓蒙活動を行ってきました。世界中から不特定多数のメールが届くので、相手先が不確かなメールや添付ファイルは開かないとか、OSやソフトは常に最新の状態にアップデートするようになど、セキュリティ関係の注意喚起を実

践してきました。また、年に複数回は教職員に対して標的型メール攻撃の訓練も実施しています。」



東京工業大学
学術国際情報センター 先端研究部門
渡邊 寿雄 マネジメント准教授

同センター先端研究部門の渡邊寿雄マネジメント准教授は、同大学が情報セキュリティ対策の強化に取り組む意義や使命を説明する。

「本学は、日本最高の理工系総合大学として、情報セキュリティ対策に長けたイメージを外部から持たれています。それだけに、

万が一にも学内でインシデントが発生すれば、本学のイメージダウンに繋がります。そのため、情報セキュリティ対策の強化は本学にとって重要なミッションでした。」

テクノロジーソリューション

「5製品を比較検討し管理性能を高く評価してSophos Intercept X Advancedを選定」

情報セキュリティ対策の強化に向けて検討を開始した学術国際情報センターでは、5社の製品を比較した。その経緯について、杉野教授は「各社の技術担当者に来学してもらい、本学の要件を伝えて対応できるかどうかをヒアリングしました。また、それぞれの試用版で性能や機能を総合的に評価しました。その際に重視したのは、価格や性能に加えて、クラウドを利用した運用管理のしやすさと、本学独自の配布方法への対応でした」と振り返る。同センターで重視した運用管理のしやすさとは、クラウド対応の集中管理システム

(Sophos Central) に関連する性能や使い勝手になる。また、学生のライセンスは卒業時点で消失するので、容易に対応できる管理性能も評価の対象となった。そして、同大学で運用している学生向けの専用ポータルサイトに対応し、簡単に配布できるかどうか、既存のシステムとの親和性も検証された。その結果、「最新のセキュリティ対策を網羅している技術性能に加えて、本学の求める管理性能をすべて満たしていた点と、本学の約17%を占める留学生に向けて、英語版のソフトやマニュアルが整備されていることもあり、Sophos Intercept X Advancedが総合的に高い評価になりました」と杉野教授は説明する。

導入の成果

「教職員のテレワークを安全に守り、学生の感染も未然に防ぐ」

Sophos Intercept X Advancedを全学規模で導入した効果について、研究推進部情報基盤課の木村修平課長は次のように話す。



東京工業大学
学術国際情報センター 研究推進部情報基盤課
木村 修平 課長

「事務局で利用している製品は、EDR機能のついた上位バージョンのSophos Intercept X Advanced with EDRを使用しており、もしもセキュリティの状態が赤になったら、自動で遮断して対応する機能があるので、影響が他に及ぶ心配がありません。また、クラウド経由の運用管理によって、テレワークで使われているPCもサポートできるので、安心感につながっています。それに加えて、コロナ対応でテレワークが急速に広がる中、使用するデバイス数が増えても既存のライセンスで柔軟に速やかに対応できた点も、Sophos Intercept X Advancedを採用して良かったと評価しています。」

学生への対応について、杉野教授は「Sophos Intercept X Advancedは、集中管理で利用者のログを取得できますが、学生個人のコンピュータ名まで記録してしまうと、個人情報の取得につながる心配があります。そこで、Sophos Intercept X Advancedには取得したコンピュータ名を変更する機能が備わっているため、固有のコンピュータ名をランダ

ムに置き換えて対応しています。また、仮に何らかの脅威が発見されても、Sophos Intercept X Advancedが即座にそのPCを遮断してくれるので、余裕を持って対処できるようになりました。また、以前に導入していたセキュリティ対策ソフトでは検出されなかったマルウェアなども、Sophos Intercept X Advancedで検知できるようになりました」と評価する。

今後の展望

「教職員を中心にDXとゼロトラストへの対応も推進していく」

Sophos Intercept X Advancedへの期待について、渡邊氏は「米国の大学では、マルウェアやランサムウェアなどが猛威を振るっており、授業が止まってしまうという被害も発生しています。そうした脅威から、最新のテクノロジーで、継続的に守ってもらいたいと思います」と話す。

また、事務部門の今後について、木村氏は「コロナをきっかけに、事務部門の働き方も変わってきています。今後はゼロトラスト

を見据えたネットワークや端末の使い方を考えていかなければなりません」と課題を語る。

今後に向けた取り組みについて、杉野教授は「教職員は、SlackやBoxなどを活用した学内でのDXを実践しはじめていますが、外部とのメールのやり取りやウェブ閲覧は今後も必須です。そういう意味では、常に脅威に晒されている部分もあり、今後のゼロトラストへの対応も検討していく上で、ソフォス製品による各端末のカバーから、より包括的なセキュリティ対策への情報提供や技術支援なども期待しています」と抱負を述べる。

